

バ・メーヌの初期ふくろう党像をめぐる
Autour des figures des premiers Chouans du Bas-Maine

西 節 夫

ふくろう党には実際歴史が欠けている。同じように彼らには、栄光はおろか正義さえないのである。ヴァンデの反徒たち、あの大兵团同士の戦闘をおこなった人びとが、ナポレオンの評したことばのもとで、心安らかに不滅のうちに眠り、そんな墓碑銘におおわれて、まだ自分たちのもっていない歴史家も期待できるというのに、彼ら、ふくろう党というあの叢林の兵士たちには、自分たちを闇のなかから引き出し、侮蔑から守ってくれるなものもないのだ。[...] これまで権威ある歴史家のだれひとりとして立ち上がり、彼らの全行動を公平に語ろうとはしなかった。しかし、デュシュマン・デ・セポーがふくろう党の蜂起にさざげた、あの拙いといえ生き生きとした書は、おそらくいつか、だれか大詩人の天才に靈感をあたえるであろう。

ジュール・バルベール・ドールヴィイ

『魔に憑かれた女』1858年版「序文」^①

序章 本稿の目的と文献について

1 本稿の目的について

ヴィクトル・ユゴーは1873年に完成した『九十三年』*Quatrevingt-treize* (1874)のなかで、国民公会をアルプスの巨大な山頂になぞらえて、ようやく「今日、その真の姿を展望することができる」と述べている^②。つまり、彼によれば、1世紀近く（正確にいえば80年）をへて、国民公会がやっと歴史的に正しく理解されるようになった、というのである。

一方、国民公会を一時期大いに脅かしたあと、報復と弾圧の悲惨な運命をたどった「ヴァンデ」*la Vendée* は、「ヴァンデ・ジェノサイド」の主張で

知られる歴史家ピエール・ショニュー Pierre Chaunu によると、1985 年の新学年度から、ソルボンヌで正式の講座・研究題目として承認されたようである^③。とすれば、「ヴァンデ」は壊滅からほとんど2世紀の歳月をへたのちに、フランス歴史学の研究対象として、完全に復権を果たしたことになるろう。

それでは、ヴァンデの反徒たちとともに戦ったふくろう党についてはどうであろうか。ふくろう党もまた「神と王のために」を旗印に決起し、カトリック・王党軍と称したヴァンデ軍団が、ショレ近郊における共和政府軍との会戦（1793年10月17日）に敗れ、ロワール河南岸のサン・フローラン・ル・ヴィエユからおびたらしい住民たちといっしょに北岸へ渡ってくると、ただちに同軍団と合流して勇敢に支援し、いわゆるガレルヌの彷徨をともにする。ふくろう党の活動の舞台は、ブルターニュ、メーヌ、アンジューの一部からノルマンディーにいたる、ロワール河北岸の広汎な地域であって、彼らはヴァンデ軍団の壊滅後もその残党と組んで、なお共和政府への抵抗をやめなかった。大革命中最大の反乱となった西部の蜂起が、ヴァンデ・ふくろう党の戦いと呼ばれるゆえんである。

たしかに、ふくろう党の反乱ないしは蜂起に関する歴史学的研究も、ことに1980年代の後半から、明らかに構造主義の影響を受けたロジェ・デュピュイ Roger Dupuy などの業績を中心にして、独自に、あるいはヴァンデ研究と関連しながら、着実に進んできたと思われる^④。しかし、「ふくろう党というあの叢林の兵士たち」の像という点では、いまもバルベール・ドールヴィイの嘆きが通用するように、筆者には思われるのである。彼らは相変わらず闇のなかにいるのだ。

そこで、叢林、要するに藪（やぶ）の兵士たちの実像——ここでは真に人間的な、したがって個性的な姿とだけ述べておくが——、それとは無縁

に、それは知られないままに、「ふくろう党」の呼称だけが類型化された属性とともに広まってゆく、そんな事態も当然生じるであろう。今日、ふくろう党が時にヴァンデの反徒と混同されるのも、その意味で蓋然性のあることといわざるをえない。

たとえば、1988年に刊行された、シャルル・ノディエの IN-Texte 叢書版『大革命と帝政下の肖像』で、ジャック・カトリーノー Jacques Cathelineau (1759-1793) について「ふくろう党のかしら」chef chouan と注記されている^⑤。カトリーノーはそもそもサン・フローラン・ル・ヴィエーユ近郷、つまりロワール河南岸部のアンジューの住民で、ヴァンデの反乱の最初の決起者として、また、ヴァンデ軍団の初代の総司令官として農民兵を率い、有名なナント攻囲戦ではその致命的な負傷が農民兵を動揺させ、軍団の敗北につながったことでも知られる人物である。この初期ヴァンデの象徴的な存在を「ふくろう党のかしら」とみなすのはおよそ不適切であって、これは明らかな誤記であるが、単純な誤記ではないであろう。なぜなら、もしカトリーノーが農民兼荷馬車屋ではなくて貴族であったら、おそらく起こりえなかった間違いだからである。

昨年ふくろう党に関する大著を刊行したアンヌ・ベルネ Anne Bernet は、ベルネの地元であるラヴァルに最近やってきたヴァンデの誇り高い若い女性が、ラヴァル近郊にふくろう党の最初の決起者というよりも元祖であり、その呼称のもとになったジャン・シュワンことコトローの家があることを知って驚き、「マイエンヌ県（旧メーヌ州の一部）にふくろう党がいたとは知らなかった。ふくろう党とはヴァンデの反徒のこととばかり思っていた」と告白した話を紹介している^⑥。

たしかに「ふくろう党」の呼称は、反乱の過程で政治・象徴的な運命をた

どり、西部の他の地域の王党派にまで拡大して用いられるようになった⁷⁾。この若い女性の思い違いにはそんな歴史的事情が反映しているとはいえ、誇り高いヴァンデ人としてはむしろ例外的な誤解であるように、筆者には思われる。というのは、すくなくとも革命史に関心をもつヴァンデの人びとのあいだでは、「ふくろう党」の呼び名の拡大適用にはきわめて敏感で、ふくろう党との同一視や一体化を拒否する傾向の方がおそらく一般的だからである⁸⁾。ともあれ、彼女の告白は、ふくろう党とヴァンデの反徒との混同が、多分ここでは勇猛・大胆とか、粘り強い抵抗者という共通項を介して、後者による前者の全面的な回収へいたったことを示す、興味深い実例であろう。

ヴァンデの反徒に比して、ふくろう党の像がなかなか闇のなかから浮かび上がってこないのはなぜか。彼らがいつまでも類型的な姿でありつづけるのは、なぜであろうか。もちろん、それには、バルベール・ドールヴィイが言及しているように、ナポレオンの対処の仕方がヴァンデとはまったく異なった、といったことも含めて、さまざまな次元の理由が考えられるだろう。しかし、異論の余地がないと思われる、いわば切実な事情をあえて二つだけあげれば、その一つは、ふくろう党員自身によってすぐれた回想録が執筆・公刊されなかったこと、つまり彼らには「第二のラ・ロシュジャ克蘭夫人」がいなかったことであり、その二は、彼らに対する根強い差別意識が存在しつづけたことであろう。

ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人についてはすでに別の拙稿でも紹介したように⁹⁾、彼女はヴァンデの反乱勃発時から鋭い観察者であったが、ことにガレルヌの彷徨においては、最初から最後まで、常にその主流のなかでも中心部にいた——いってみれば、彼女が生き残ったことを除いては、ガレルヌの彷徨のもっとも完全な体験者であり、しかも彷徨の語り部として驚くほど意

欲的であった人物である。1814年に初めて刊行された夫人の『回想録』*Mémoires de Mme la marquise de La Rochejaquelein, écrits par elle-même, rédigés par M. le baron de Barante*が、彼女の意図通り、ヴァンデの反乱の正義の主張に、その弁護に役立ったことはいうまでもないが、そこには戦いの様子だけでなく、司令官たちの肖像から、農民兵士たちの姿、そして一般住民の受難の生までが、彼ら・彼女たちの忍んださまざまな思いとともに活写されている。

もちろん、ふくろう党の戦いについても、たとえばテルシエ Tercier やピユイゼー Puisaye が公刊したような、体験者の回想録が存在する⁽¹⁰⁾。しかし、公刊者たちはいずれも帰国貴族であって、ふくろう党を指揮し、ともに戦ったとはいえ、地元の間人ではないいわば輸入ふくろう党員であり、しかも途中から戦闘に加わり、土着のふくろう党の掌握にすらてこずった者たちである。端的にいえば、彼らのふくろう党観察はその力を軍事的に活用するためのものであり、したがって視線自体限定的であって、ふくろう党像の再構築のためには若干参考になる、せいぜいその程度の有効性と意義しかもちえないものである。

ふくろう党に対する差別的な認識については、ふくろう党を題材にした19世紀の文学作品、いわゆるふくろう党ものの小説 *romans chouans* がなによりも雄弁に明かしていると思われる。ふくろう党はヴァンデ軍団のように会戦をおこなうよりも、もっぱら地勢を利用した待ち伏せや奇襲攻撃を得意とした。まずそのことが、つまり彼らが「叢林の兵士」であったこと自体が、伝統的な戦法に反した卑劣な行為とされたことは容易に理解されるが、それに加えて、ことに初期において、元塩密輸入たちがふくろう党の中核をなしたことが、彼らへの差別意識を生んだことも明らかである。

バルザックは『ふくろう党』 *Les Chouans* (1829) のなかで、第一次のふくろう党の反乱が「この地方の魂である司祭の声に従った」ものであることを指摘したあと、「しかし」、実態はおよそ聖戦らしくない山賊行為であることを強調するのに、次のように述べている。

大胆な密輸入業者のコトロー兄弟というのがいて、その戦いはこの兄弟の名で呼ばれるようになったのだが、彼らはラヴァルからこのフージュール一帯にかけてその危険な商売をいとなんでいた。しかし、この田園部の蜂起にはいささかも気高いところはなく、もしヴァンデが山賊行為を戦争と化したとすれば、逆にプルターニユはその戦争を山賊行為と化したと言いつ切ることができよう。王族の追放とか宗教の破壊とかは、ふくろう党にとっては略奪の口実でしかなかった。そこでこの内乱で起きる事件は、この地方の風俗同様、どこか原始的で粗暴な性格をおびるにいたった。⁽¹¹⁾
[下線は筆者による]

文中の「しかし」は「したがって」に変換可能と思われるであろう。それほど作者は、蜂起自体の宗教性と実態との矛盾を説明するのに、いやそれを必然に変えるために、ふくろう党の元祖＝元塩密輸入人という事実を重視して、それを効果的に利用しているのである。

さらにバルザックは、ふくろう党の略奪の具体的な手段としての「足焼き」を、女性主人公の目を通して、あたかも語り手＝作者自身が見てきたかのように描き⁽¹²⁾、ネルヴァルもまた、未完に終わった『ファイヨール侯爵』 *Le Marquis de Fayolle* (1849) で、「足焼き」をいかにもふくろう党の常套手段であったかのように扱っている⁽¹³⁾。そしてユゴーの『九十三年』にいたると、

国民公会がアルプスの高峰にたとえられる一方で、ふくろう党＝ブルターニュ人は、森の民であるがゆえに必然的に愚昧であるという、いわば普遍的な、それだけに断定的な「森の民愚昧論」が展開されるのである⁽⁴⁾。

いうまでもなく、この大小説家たちがこうしたふくろう党像を創出したのではない。ことにバルザックの場合、フェニモア・クーパーの影響が顕著であるとはいえ、彼らは同時代の一般的な観念にいわば信念をもって乗ったにすぎず、だからこそ、ふくろう党に対する広く根深い差別意識のあかしになるのである⁽⁵⁾。しかし、この種の表象が、ふくろう党への差別的な観念を後年にいたるまで定着させ、そして、この反徒たちをきわめて類型的な姿のまま、闇のなかこそふさわしい存在として放置させるうえで、大きな役割を果たしたことは否定できないであろう。

ふくろう党に関するバルザックやユゴーなどの描写と言説は、今日の読者に「一体、ふくろう党とはいかなる人びとであったのか」という素朴な、すなわち非、あるいは反イデオロギー的な疑問を、当然抱かせるであろう。筆者のふくろう党像への関心もそこから出発したのであった。

実際、ふくろう党には不明な点が多い。バルザックの『ふくろう党』で、党员たちの不気味なふくろうの鳴き声が飛び交うだけでなく、1827年に設定された彼の『ピエレット』*Pierrette* (1839年末執筆)では、孤児で幼なじみの少女ピエレットの身を案じて、ブルターニュからシャンパーニュ地方までやってきた若者が、彼女と連絡をとるのに、ふくろう党の合言葉として父親から仕込まれたふくろうの鳴き声を使うが⁽⁶⁾、果たして彼らは、また彼らの前身である塩密輸入者たちは、相互連絡のためにふくろうの鳴き声を真似したのかどうか。彼らの呼称の起源にかかわるそんな問題すら、はっきりしていない。すくなくとも微妙な異説が存在する。

本論稿で取り上げるふくろう党は、後述する方法上の理由により、ジャン・シュワンをはじめ、もっぱらバ・メーヌの初期ふくろう党のかしら・隊長たち数名と、彼らをめぐる人びとにすぎない。したがって、ささやかな試みに終わるに相違ないが、彼らがどんな暮らしのなかから決起にいたり、何を思いながらいかに戦い、そして多くが死を迎えたか——それを模索することによって、特に彼らの精神的な肖像をいくらかでも闇のなかから明るみに出すこと、そのためにいささかでも寄与することが本稿の目的である。

ロジェ・デュピュイは、1988年に公刊された労作『革命からふくろう党の蜂起へ—ブルターニュの農民たち 1788-1794—』の序説中で、「今日の論争には、ヴァンデとふくろう党の蜂起が西部の反乱の二つの形態であるにもかかわらず、前者を後者から切り離し、さらにその反動的すぎるコンテーションをすべて消し去って、それを自由の象徴に変える傾向がある」という趣旨のことを述べている⁽¹⁷⁾。筆者も同じ危惧をいだくのであって、それが本稿執筆の動機の一つであることも、ここで記しておきたい。

2 文献について

この論稿でもっぱら資料とするのは、デュシュマン・デセポー Jacques Duchemin Descépeaux の著作と、1852年に初版が刊行されたエミール・スーヴェストル Emile Souvestre の『ふくろう党の蜂起場景』*Scènes de la Chouannerie*⁽¹⁸⁾、並びにアンヌ・ベルネの近著『ふくろう党の蜂起全史』*Histoire générale de la Chouannerie* (2000) である。本論に入る前に、それぞれについて簡単に紹介しておく必要があると考えるが、なかでも中心となるデュシュマン・デセポーの著述については、まず版の問題から述べておか

なければならない。

デセポーの著作には、いわば「書簡」版と「史書」版の二種がある。前者が『ふくろう党の蜂起の起源並びにバ・メヌのふくろう党に関する書簡集 — 国王に献じる —』*Lettres sur l'origine de la Chouannerie et sur les Chouans du Bas-Maine, dédiées au Roi* であって、第一巻が1825年に、第二巻がその2年後に刊行された。これは、著者自身の説明によると、そもそも『革命期フランス人風俗タブロー』*Tableau des mœurs des Français pendant la Révolution* と題する著作を企てたある者の依頼により、その最終部に役立つように、調べが付き次第書き送った手紙を、のちにまとめて国王シャルル十世に献じたもので、総計68通の手紙と証拠書類からなっている大著である⁽¹⁹⁾。

しかし、この「書簡」版成立のそもそものいきさつについては、仮構の可能性がある。デセポーの努力と成果を高く評価するジャン・ドロウ Jean Drault が、1927年刊行の自著のなかで、「残念ながら、彼は当時流行の書簡体形式に従った」という旨のことを述べているのが⁽²⁰⁾、その積極的な根拠であるが、さらに筆者には、デセポーが書簡体形式の利点にしきりに言及していること自体が、その仮構性を裏書きしているように思われるのである。

たとえば、デセポーは第二巻の最初の手紙で、ただ依頼者の役に立ちたいという目的だけでおこなった探求の成果を、傷痕のふくろう党員と戦没党員の寡婦救済のために、第一巻として予約制で公刊したことを明かしたあと⁽²¹⁾、(したがって当然公刊を前提とした) 以後の記述もこの語りの形式に固執する理由として、「それ自体あまり重要でなく、しかもたいていの場合まったく相互関係のない出来事」を扱うには都合がよいと述べているだけでなく、次のように記している。「加えて、書簡体であれば、歴史を書こうと企てる

者に期待されるあの文章の正確さ、文体の典雅さと上品・高尚さがあまり要求されないですむ。手だれの書き手でない筆者としては、自分の仕事をやりやすくし、また読者の寛容が願えるようなことは、なんでも探求してみようと思ったのだ」と⁽²²⁾。おそらく、デセポーは、だれか他の著述家からふくろう党に関する情報の提供を依頼されたのでもなければ、またそれに逐次こたえる便宜上でもなく、もっぱら文筆家としては素人である自分の書きやすさのために、進んで「当時流行の書簡体形式」を採用したのではないだろうか。断定はできないが、筆者の一応の結論である。

ともあれ、彼は、1855年にいって、この「書簡」版を物語形式の「史書」版にまとめ直して公刊した。それが1巻本の『ふくろう党の蜂起回顧録』*Souvenirs de la Chouannerie* であって、著者名もデュシュマン・デ・セポー *Des Cépeaux* と貴族的な姓に変わっている⁽²³⁾。そこで、以後の本稿では、彼の名前をこの姓で統一して表記することをお断りしておきたい。

バルベール・ドールヴィイが「あの拙いとはいえ生き生きとした書」*Le livre, assez mal écrit, mais vivant* と評しているのはこの「史書」版の方であるが、「書簡」版にくらべれば、はるかに読みやすく、つまり情報をえやすくなっている。というのは、なによりも「書簡」版では、著者自身も認めている「たえず後もどる叙述上の欠点」⁽²⁴⁾のために、読者が話 *récit* を再構成するのに多大の努力を必要とするのに対して、こちらは事件・事項の配列を大幅に変えることで、要するに、部分的にも全体的にもプロット性のしっかりした読み物になっているからである。反面、内容面で、「書簡」版を公にしたおかげでえられた新たな情報を、誤謬訂正も含めてフル活用したのが本書である⁽²⁵⁾、という著者のことばに偽りはないとしても、プロット重視、描写の簡潔化、あるいは分量の圧縮のために、前者では記述されながら「史書」版で

は省かれてしまった部分に、貴重な話や情報があることも事実である。

バルベール・ドールヴィイがこの「史書」版に言及しているのは、彼の故郷であるノルマンディーのふくろう党にはそれに匹敵する史書すらない、という文脈のなかにおいてであって⁽²⁶⁾、実際、デ・セポーの業績は、地域的にも時期的にも限定されたものとはいえ、その意義は大きいといわざるをえない。ふくろう党には第二のラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人がいなかった。そのため生じた侮蔑的な忘却の危機から真っ先に彼らを救おうとしたのが、反乱当時はまだ地元バ・メヌの幼い少年であった彼であり⁽²⁷⁾、その著作だからである。

デ・セポーは「書簡」版の冒頭で、シャルル十世に宛てて、「ふくろう党への間違った非難を打破するために」、「ふくろう党とは何であるのか、彼らは何をし、どんな辛苦に耐えたのかを述べようと企てた」と記しているが⁽²⁸⁾、それはとりもなおさず、彼らに代わって回想録を書くことであった。そのことは、たとえば「史書」版について、「この恐ろしい劇的事件のいくつかの場景」を、「当事者なら可能であったように描き、そうすることで、できる限り、彼らがまだ書いていない回想録の代わりになるように努めた」と明言している通りである⁽²⁹⁾。そのために彼は、舞台を自分の故郷であり、「いまも住んでいるバ・メヌ地方」に限り、したがってアンジューやブルターニュの反徒すら主対象から外して、もっぱら地元の初期から中期にいたるふくろう党に関して、元党員だけでなく、かつての敵方も含めた反乱の生き残りを目撃者から徹底した聞き取り調査を実施し、また現地踏査をおこなったのであった⁽³⁰⁾。

デ・セポーの著作は、とりわけこの蜂起の舞台での聞き取り調査への固執という、その方法的な特色によって、今日でも高く評価されていると思われ

る。筆者がそれを中心的な資料とし、したがって、バ・メーヌの主として初期のふくろう党に対象をしぼって、彼らの精神的な肖像を探ろうとするゆえんも、まさにそこにあるが、同時に彼の記述には、この種の試みには不都合な、大きな難点がある。それはロジェ・デュピュイが注意を喚起しているように、いや歴史家の指摘をまつまでもなく、聖人伝的な美化・賛美が顕著なことであって、「彼のヒーローたちの精神的な肖像には慎重でなければならない」のである⁽³¹⁾。

他の二つの文献が、その点でも、つまりデ・セポーによるふくろう党像のそんな難点をいわば補正するためにも役立つにちがいないと、筆者は考えている。

まず、エミール・スーヴェストルの『ふくろう党の蜂起場景』(1852)について。著者は1806年にブルターニュのモルレー(フィニステール県)で生まれ、1835年以降パリで小説家、劇作家、さらには文学教師としても活躍し、1854年に同地で没している。彼は特にブルターニュの風俗を描いた中・長編小説で相当の成功をおさめたが、すでに1830年代前半のナント在住時代からブルターニュ関係の研究的エッセーを発表しており⁽³²⁾、ふくろう党の蜂起にも、おそらく故郷の歴史・風俗全般への関心のなかで、早くから注目したにちがいない。ベルネによれば、彼もデ・セポーと並んで、すくなくとも後者に劣らず、元ふくろう党員からの聞き取り調査に「意を用いた」代表的な人物なのである⁽³³⁾。

『ふくろう党の蜂起場景』は、形式、目的、性格など、あらゆる面でデ・セポーの著述とは異なる。本書の主人公は著者と同じようにブルターニュ人で、職業も彼が一度は志した弁護士であって、革命時には共和派であった者の末裔と設定されている。その「私」が、メーヌのふくろう党に対する関心

から、ちょうど最大の年中行事の一つである麦打ち祭りのおこなわれる夏の数日、同地方にでかけて、元ふくろう党員や老司祭から、苦勞して、あるいは巧みな誘導によって話を聞き出す。本書の内容は彼らからえた証言を一次的な資料とする(と称する)物語と、「私」の述懐あるいは省察からなっている。紀行文形式の点ではスタンダールの『あるブルターニュ旅行者の手記』*Mémoires d'un touriste en Bretagne* (1838)を思わせるとはいえ、歌物語的な場面もあれば、明らかにロマネスクな要素もまじり、要するに本書は、形式と内容の両面においておよそ史書ではなく、相当に文学性の高い歴史読み物、といった印象すらあたえるものである。

したがって、『ふくろう党の蜂起場景』は史実に関する資料としては独自性を欠くが、しかし、本論稿の目的にとっては貴重な示唆に富んでいると思われる。二つだけ理由をあげれば、第一に著者スーヴェストルの関心が出来事自体よりもその人間的な解釈にあって、彼はそれを通じてヒーローたちの人間性の評価にいたろうとしているからである。一言でいえば、著者の関心も目的もいわばきわめてモラリスト的なことである。第二に、彼がいかにも19世紀前半の作家らしく、地方気質の微妙な差異を重視して、メヌ人気質と、ことにデ・セポーが強調するその宗教性に鋭い分析を加えていることである。もちろんブルターニュ人の立場からであるが、しかし、ブルターニュ出身のモラリストでなければできなかったことと、筆者は評価している。

最後に最近刊のアンヌ・ベルネ『ふくろう党の蜂起全史』(2000)について。ベルネは生粋のメヌ人で、ここ10年ほどのあいだに、ふくろう党やセヴィニエ夫人に関するものなど、多分もっぱらブルターニュにゆかりの歴史上の事件や人物を取り上げた著作を、次々と精力的に発表している小説家ないしは伝記作家である。

『ふくろう党の蜂起全史』の意図について、彼女は前書きで要旨次のように述べている。「ヴァンデとちがって、ふくろう党の蜂起は時間的にも空間的にも連携性に乏しく、また不連続的な反乱の寄せ集めであるために、特定のエピソード的事件や人物を対象にした部分的な著作が多く書かれて、メーヌ、ブルターニュ、ノルマンディーの蜂起を最初から最後まで一巻にまとめた全史が存在しない。著者はまさにその空隙を埋めようと試みたのだ」と³⁴⁾。その試みを、ラ・ルエリーの構想したブルターニュ連盟の陰謀を基軸とし、さらに、蜂起の性格を、ケルト魂の発揮という視点からとらえることで実現したのが本書であって、きわめて詳細な戦史であると同時に、壮大な歴史物語となっている。

本論稿では、とりわけ次の二点において、同書に多くを負うことになるだろう。まず、史実に関して、膨大な資料を駆使した『ふくろう党の蜂起全史』は実にくわしく、多くの不明な点をはっきりさせているが、たとえば、事件の日付の確定もその一つである。出来事の時間や、また時には曜日の方ははっきりしていても、日付が確定的でないというのは、おそらく、当事者の記憶にたよった回想録や準回想録に共通する特徴であって、ラ・ロシュジャ克蘭夫人の『回想録』にもしばしば認められる難点であるが、デ・セポーの著作もそれを免れていない。本書による日付の確定・明示が、事件の推移を把握するためだけでなく、当事者の内面的な像を追ううえでも貴重なことはいうまでもない。要するに同書は、史実全般に関する記述の詳細さと明確さによって、デ・セポーを読むためには欠かせない、参考文献ないしは注解書役を果たしてくれるにちがいないのである。

第二に、この『ふくろう党の蜂起全史』では、「神と王のため」だけでなく、ブルターニュの復権もめざしたラ・ルエリーを中心とする国際的な陰謀

に特に重点が置かれていて、そのために、デ・セポーの著述とはほとんど対蹠的なまでに、ふくろう党の蜂起の政治的な側面が徹底的に描かれている。その結果として、同書が、デ・セポーによる初期ふくろう党像の聖人伝的な美化に対して、いわばそのヴェールをはいで見せてくれることも、本論稿の目的にとって大いに貴重な点である。

(2001年10月20日序章筆了)⁽³⁵⁾

[注]

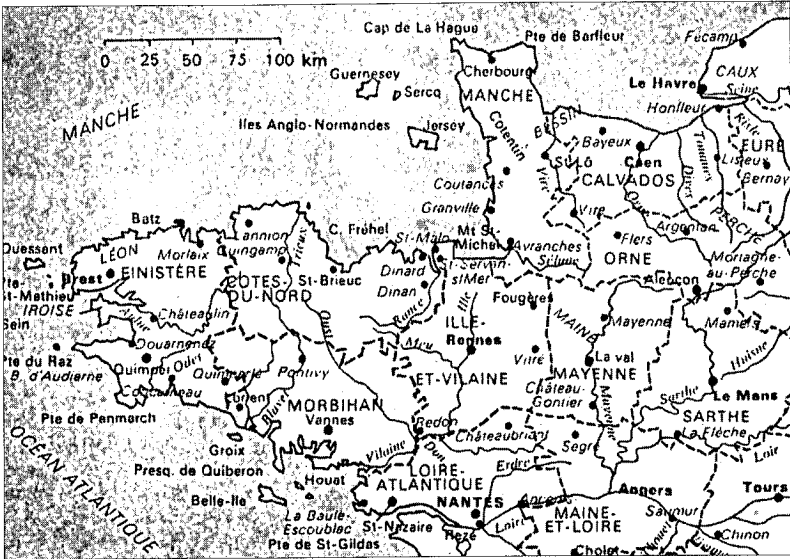
- (1) 『魔に憑かれた女』初版の刊行は1854年で、この序文は再版に付されたものである。Barbey d'Aurevilly (Jules) : *Œuvres romanesques complètes* t.1, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1964, *Préface* de l'édition de 1858 à *L'Enfermée*, p.1350. なお、ナポレオンは、ヴァンデに対しては指揮官たちを「巨人」と形容するなど多くの賛辞を呈したが、ふくろう党には冷酷であった。
- (2) Victor Hugo: *Quatrevingt-treize*, Édition de J.Boudout, Classiques Garnier, Garnier Frères, 1963, p.178-179.
- (3) Reynald Secher: *Le génocide franco-français: La Vendée-Vengé*, Presses Universitaires de France, 1986, *Avant-propos* de Pierre Chaunu, p.21 を参照。
- (4) ロジェ・デュピュイの業績については後で言及するので、ここではヴァンデ研究と関連しておこなわれた研究成果を二つだけ挙げておく。*Vendée Chouannerie Littérature, Actes du Colloque d'Angers 12-15 décembre 1985*, P.U.d'Angers, 1986 / *La Vendée dans l'Histoire, Actes du Colloque de La Roche-sur-Yon en avril 1993*, Perrin, 1994.
- (5) Charles Nodier: *Portraits de la Révolution et de l'Empire*, préface, bibliographie, chronologie par Jean-Luc Steinmetz, notes par Jean d'Hendecourt, collection In-Texte, Tallandier, 1988. t. I, p.404 (p.337, n.284).
- (6) Anne Bernet: *Histoire générale de la Chouannerie*, Académique Perrin,

- 2000, p.12 を参照。
- (7) Roger Dupuy: *Les Chouans*, coll. La Vie quotidienne, Hachette Littératures, 1997, p.8 を参照。
 - (8) 筆者の個人的体験を記すと、1988 年夏にアンジェ・カトリック大学を訪ねたおり、若い女性教職員から、「ヴァンデ・ふくろう党の戦い」という両者を結びつける呼称自体への激しい異議申し立てと、その理由を聞かされたことがある。
 - (9) 拙稿「ガレルヌの彷徨を追って — ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人『回想録』抄 — 序章」、成城大学大学院文学研究科『ヨーロッパ文化研究』第9集。同論文の特に44-60頁を参照してほしい。
 - (10) テルシエの回想録 *Mémoires politiques et militaires (1770-1816)* は1891年に刊行されたが、近年の版としては Claude Augustin Tercier: *Mémoires d'un chouan 1792-1802*, coll.In-Texte, Tallandier, 1989 がある。ピュイゼーの回想録 *Mémoires* は6巻本が、おそらく19世紀初めから王政復古時代にかけて、数度にわけて出版されたが、最近刊の版としては Joseph de Puisaye, *Mémoires*, Cessons-Sévigné, 1999 がある。
 - (11) Honoré de Balzac: *Les Chouans ou la Bretagne en 1799, La Comédie humaine*, t. VIII, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1977, p.919.
 - (12) *Ibid.*, p.1079-1084.
 - (13) Gérard de Nerval: *Le Marquis de Fayette, Œuvres complètes*, t. I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1989, p.1211.
 - (14) Victor Hugo: *op.cit.*, p.238-239.
 - (15) バルザックの場合、ことに七月王政下に政治思想の公的な転向をおこなって以降、ブルターニュないしふくろう党に対する見方は多義性を強めるし、ユゴーのそれも、母親がブルターニュ出身であったこともありおよそ単純ではないが、これらの問題については稿を改めて扱いたい。
 - (16) H. de Balzac: *Pierrette, La Comédie humaine*, t. IV, Pl., 1976, p.131.
 - (17) Roger Dupuy: *De la Révolution à la Chouannerie Paysans en Bretagne 1788-1794*, Flammarion, 1988, p.5 を参照。
 - (18) 本論稿では次の版による。 *Scènes de la Chouannerie par Émile Souvestre*, deuxième édition, Michel Lévy Frères, 1854.
 - (19) 第一巻が444頁、第二巻が464頁からなり、いずれも「国王の裁可によ

り、王立印刷所にて印刷」されているが、本論稿では、第一巻が 1986 年に、第二巻が 1987 年に刊行された次の復刻版による。J. Duchemin Descépeaux: *Lettres sur l'origine de la Chouannerie et sur les Chouans du Bas-Maine; dédiées au Roi*, Éditions « L'Ancre de Marine », Saint-Malo.

- (20) Jean Drault: *Jean Cottereau dit Jean Chouan*, Éditions Spos, Paris, 1927. p.5.
- (21) D. Descépeaux: *Lettres.*, éd. cit., t. II, p.2.
- (22) *Ibid.*, p.13-14 を参照。
- (23) Duchemin Des Cépeaux, *Souvenirs de la Chouannerie*, H. Godebert, Laval, 1855. なお、本論稿では復刻版 (L'Arche du Livre, Paris, 1970) による。また、以後の注ではこの「史書」版は Souv.「書簡」版は L. と略記して区別する。
- (24) L., t. II, p.16.
- (25) Souv., p.6-7 を参照。
- (26) B. d'Aurevilly: *op.cit.*, p.1350 を参照。
- (27) L., t. I, p.316-317 によると、著者は 1794 年 4 月 6 日時点で 10 歳未満。かなり裕福な都市王党派の子息で、父が容疑者令で収監されたあと、母とラヴァル市内で暮らす。が、ふくろう党の戦場となった近郊に別荘があり、雇い農民の伝えた戦況を獄中の父に知らせたこともあるという。
- (28) L., t. I, p.V, *Épître au Roi*.
- (29) Souv., p.5.
- (30) L., t. I, p.6-12 と Souv., p.5-6 を参照。
- (31) R. Dupuy: *Les Chouans*, éd., cit., p.91.
- (32) エミール・スーヴェストルの経歴については、主として『19 世紀大百科事典』Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle* を参照した。
- (33) Anne Bernet: *op. cit.*, p.13.
- (34) *Ibid.*, p.11. *Avant-propos*
- (35) 本論稿は成城大学特別研究助成金制度による成果である。

パ・メーヌの初期ふくろう党像をめぐって



ふくろう党の蜂起地域

(アンヌ・ベルネ『ふくろう党の蜂起全史』より転載)